大型ディスプレイは生徒たちが持つタブレットとクラウドでつながっている

ICTで教育を再デザインし生徒の力を最大限に引き出す

「デザイン思考」を教育の大きな柱に掲げ、「創造性教育」によって新たな価値を生み出す力の育成に取り組んでいる瀧野川女子学園。先進的なICT技術で「黒板・ノート・鉛筆」を一掃し、学びの質的変換を図ることで、効率的かつ楽しい授業を実現して生徒の能力を飛躍的に高めている。その可能性について、山口龍介副校長に伺った。

手書きデバイス&クラウドで学校現場を劇的に変革

瀧野川女子学園は、教育の未来の姿を先取りしている。大げさではない。授業の進め方や生徒の学びが、質的に異なるからだ。山口龍介副校長は、それを教育の「再デザイン」と呼ぶ。

「教育とは、脳と心に作用して新しい人格形成を助けることであり、生徒の中に新しい考え方を育てることです。望ましいのは直接対話ですが、1対1でしかできません。そこで、黒板とノートと鉛筆を迂回することで擬似的に対話してきました。しかし、最新のICTツールを使えば、教員と生徒、生徒同士が直接つながります」（山口副校長）

瀧野川では、2016年から全生徒および全教員が、A4サイズのタブレット（iPad）と、手書き入力用のタッチペン（Apple Pencil）を持ち、全授業で活用している。だから、教室に黒板はない。板書すべき内容はすべて手元のタブレットで見られるからだ。

生徒は、タブレットに配信される事前プリントで基礎知識を確認したうえで授業に臨む。教員は授業前に全生徒の理解度が確認できるため、授業では理解しにくい箇所を重点的に解説し、良いアイデアや意見が出れば全員で共有し、発展的な内容へと踏み込める。

A4サイズのタブレットと、リアルタイムで共有できる手書きデバイスの組み合わせは最強だ。ノートと鉛筆から違和感なく移行できるだけでなく、そのノートを全員が閲覧加筆したり、履歴も辿ることができる。まさにクラス全体で脳がオープンになった状態で学び合いができるようになるのだ。

「板書や、生徒の理解度を確認する机間巡視の時間などが不要なため、生徒の理解を伴ったまま、授業の進行速度を実質的に2~3倍に引き上げることができます。そのため、授業時間内に従来の2~3倍の演習を行うことが可能になるのです」（山口副校長）

副校長 山口 龍介 先生

今春、この教育システムで学んだ生徒が、一般公募推薦で医学部に合格しているが、密度の濃い授業や豊富な演習だけでなく、オープンな学びで自分の考えをまとめ、適切に発信する能力を鍛えられたことも大きい。クリスマス前に大学合格を決めた生徒は7割以上にのぼっており、新しい大学入試に合致した授業形態ともいえるだろう。

オンライン授業にも即応でき今年度からは「ゼミ」も開始

普段からこうしたICTを駆使した授業を展開してきたため、コロナ休校中も授業に滞りはなかった。従来のシステムにテレビ会議システムを実装するだけで、通常授業とほぼ変わらないリアルタイム授業を時間割通りに行うことができたからだ。実習系の学びだけはできなかったが、登校が始まってから集中的に行って解決した。

こうして、効率的で発展的な授業が可能になると、授業時間数に余裕ができる。そこで今年度から、高2・3で水曜午後の授業を廃止し、「ゼミ」を行うことにした。児童教育やプログラミングなど進路に対応した講座から教養講座まで、様々なテーマを開講。参加は自由なため、受験勉強や自分の好きなことに時間を使う生徒もいる。

「大学受験にもしっかり対応できるうえ、創造性を伸ばす時間に使えるという意味で、本校の教育システムは、これからの教育のあるべき姿を示していると思います」（山口副校長）

すべての授業でiPadを使用し、ファシリテーション型の教育を行っている

お問い合わせ 瀧野川女子学園中学高等学校 TEL.03-3910-6315

説明会・公開行事についてはHPにてご確認をお願いします。

本記事は『日経ビジネス／日経トップリーダー特別版 AUTUMN.2020〈東京ストーリー教育特集号〉（日経BP社）』に掲載されたものです。〈禁転載複写〉